

で病変は消失。2例目は63歳の男性で交通事故で頭部打撲、薄い急性硬膜外血腫で入院、意識は清明。入院6日目のCTでlt. SCA 領域の梗塞を認め、DSAでlt. SCA 閉塞と右頸部VA（第3-4椎間）の解離を認めた。抗血小板療法にて3カ月間脳梗塞の再発なし。

【結語】きわめて軽微な外傷でも椎骨動脈損傷は起こりうる。抗凝固、血小板療法で治癒が期待でき、まず試みるべきだが、親動脈閉塞、Stent 留置などが必要な症例もあるだろう。

A-42) 外傷性髄液鼻漏に対する鼻内内視鏡下整復術の有用性

赤池 秀一・藤井 博也 (藤井脳神経外科
病院脳神経外科)
二見 一也 (氷見市民病院
脳神経外科)
堀川 勲・達富 真司 (同耳鼻咽喉科)

【目的】経頭蓋的髄液鼻漏閉鎖術は時に侵襲的である。我々は鼻内内視鏡下整復術を行いその有用性を検討した。

【対象・方法】症例1は49歳女性。階段での転落による受傷。頭部 Xp, CTにて前頭洞に及ぶ頭蓋骨骨折、急性硬膜外血腫を認めた。手術では血腫除去と、前頭洞内を脂肪、フィブリン糊にて閉鎖した。術後6日目に髄液鼻漏が出現し、CTで篩骨洞に漏孔が疑われた。症例2は33歳男性。交通事故による受傷。頭部 Xp, CTにて前頭蓋底骨折、急性硬膜外血腫を認めた。手術では血腫除去後、前頭蓋底の骨片を除去し、前頭洞、篩骨洞を脂肪、フィブリン糊にて閉鎖した。術後41日目に髄液漏が出現した。インピスト CTで左篩骨洞と蝶形骨洞からの髄液漏を認めた。これらに対し、内視鏡下に漏孔を確認の上、鼻中隔軟骨片、粘膜片、フィブリン糊を用いて被覆した。術後、髄液鼻漏は消失した。

【結論】鼻内内視鏡下整復術は非侵襲的であり、かつ有用であった。

A-43) 慢性硬膜下血腫治療における穿頭血腫腔ドレナージ術と穿孔洗浄術の比較検討

岡田 裕子・赤井 卓也 (金沢医科大学)
岡本 一也・飯塚 秀明 (脳神経外科)
角家 暁

慢性硬膜下血腫の治療における穿頭血腫腔ドレナージ術と穿孔洗浄術の結果を比較検討した。【対象】1996年2月から1999年2月までに手術を行った42例（男性31

例；女性11例、平均年齢74.6歳）。穿頭血腫腔ドレナージ術（ドレナージ術）21例（男性13例；女性8例、平均年齢75.5歳）；穿孔洗浄術21例（男性18例；女性3例、平均年齢73.6歳）。頭部外傷の既往はドレナージ術群10例；穿孔洗浄術群13例、症状発現から手術までの期間はドレナージ術群8.3日；穿孔洗浄術群28.2日であった。

【結果】手術後の入院期間はドレナージ術群14.6日、穿孔洗浄術群25.9日であった。再発はドレナージ術群では1例（4.8%）、穿孔洗浄術群では5例（23.8%）であった。【結語】慢性硬膜下血腫の治療法として穿頭血腫腔ドレナージ術は、穿孔洗浄術と比較し手術後の入院期間が短く、再発例も少なかった。

A-44) ガンマナイフで治療した海綿静脈洞部海綿状血管腫の1例

瀬尾 善宣・福岡 誠二 (中村記念病院)
佐々木雄彦・高梨 正美 (脳神経外科)
中村 博彦

海綿静脈洞部海綿状血管腫は、摘出術による出血量が多く、全摘困難なものが多い。また、脳内海綿状血管腫に比べ、放射線感受性が良いことが報告されている。我々は、海綿静脈洞部海綿状血管腫をopen biopsyにより診断し、ガンマナイフによるradiosurgeryを施行し、経過良好であったため報告する。

症例は79歳女性。右眼瞼下垂で発症し、1週間後当院に入院した。入院時右動眼神経麻痺以外の神経学的欠損症状を認めなかった。右海綿静脈洞部に、CTで軽度高吸収域、MRIのT1WIで低信号域、T2WIで高信号域、CT・MRIとも、造影剤で均一に強く増強される腫瘍性病変を認めた。発症1ヶ月後に右extradural frontotemporal approachにてbiopsyを行い、cavernous angiomaと診断した。術後わずかな内転障害の改善を認めた。術後4ヶ月目でガンマナイフによるradiosurgeryをmarginal dose 15 Gyで施行した。ガンマナイフ5ヶ月後のMRIで著明な縮小を認めた。